

---

報告者名	木村 敏明	被調査者生年	1944年(男)
調査者名	木村 敏明	被調査者属性	浜市区長
補助調査者	なし		

---

#### 地域の歴史について

もともとこの地域は半農半漁と言いつつ、漁業をやっている人はあまりいなかった。話者の家は代々農業。明治頃、浜市には河南から来た財閥のS家があったが、今はいない。

平成元年ころまで浜市には185世帯があった。しかし自衛隊飛行場の騒音問題で海に近い東浮足(ヒガシウタリ)地区およそ80世帯のうち50世帯位が地区の外に移転してしまった。残りの家は主に新田地区などに移った。話者もその1人で、新田にもっていた自分の畑に平成元年に家を建ててそこに引っ越した。東浮足の土地は国が買い上げて緑地や公園として整備した。このことによって浜市の世帯数135位にまで減ってしまった。

津波については、チリ地震のときに鳴瀬川を波が遡上したという話を聞いたくらいで、予想もしていなかった。浜市地区は鳴瀬川側からも浸水し、海からはさみうちになってしまって大きな被害が出た。一瞬で浜市の暮らしも文化も破壊されてしまった。

#### 浜市の現状

7月1日に公表された市の災害復興計画で、浜市は1メートル50センチほどかさ上げをしなければ家の建築が認められないことになった。これはつまり、危険地域に指定されたということであり、大半の住人は高台へと移転することを考えている。135世帯のうち、現時点でもとに戻っているのは6世帯だけである。そのうち漁業者は1世帯だけで、もともとあった10世帯ほどの漁家の多くも職住分離を考えている。

集団移転先も国道より北側の地区にすでに確保されている。69世帯入居可能なところに今のところ56世帯の入居が決まっている。また、近くに公営住宅も建つことになっているので、そちらへの入居を希望している人も多い。個人的に移転先を見つけて移る人も少なくない。しかし、浜市地区の土地の買い上げが進まないため、なかなか将来の見通しが立てられない。行政との面談にまだ参加していない人もいる。

#### 漁業の現状

漁家はもともと10世帯程度しかなく、そのほとんどが海苔とカキの養殖をおこなっていた。魚をとっていたのは2世帯だけだった。漁業協同組合もかつては浜市にあったが、現在は鳴瀬漁協(事務所は東名)に統合された。

震災後、浜市港は砂が入り込み現在まだ使えない状態で、漁船は大曲の港を使わせてもらっている。ただし、漁港整備の予算はついたようで、これから修理されるのではないかと思う。7月14日には、宮戸の漁港で東松島の漁港復興の地鎮祭が開かれることになっている。最近になって、5世帯が共同で海苔の加工場を建てて作業を再開した。

#### 農業の現状

浜市は話者も含め、零細な兼業農家が多い。東松島農協浜市支部があり、農家の人たちが年に4回用水路管理の清掃や草取りをおこなっているが、共同の作業はそれくらいだった。

現状では浜市の農家で農業をしている人はいない。震災で農業機械が全滅し、それを改めて買って農業をするこ

とは難しい。話者も、隣の平岡（牛網字平岡）で法人組織をつくって農業をしているサンエイトに委託している。国の震災対策事業で農業集約化事業に奨励金がついているため、このような会社は震災後急速に成長している。サンエイトは震災前 30 ヘクタールほどの土地で事業をしていたが、今では 100 ヘクタールくらいもっている。話者は勤め人をしながら 5 反ほどの水田をやってきて、退職後は農業だけをしてきたが、今回の震災でそれも委託して小作料だけもらうようになった。

### 潮垢離の現状

6 月 30 日に加美郡宮崎熊野神社から、熊野神社宮司の旦那さん、総代長、庶務、会計の 4 人が訪ねてきて、来年 4 月 21 日に簡素化した形でお潮垢離をおこないたいとの意向を伝えられた。そのとき渡されたメモによれば、4 月 21 日にお潮垢離、24 日に宮崎熊野神社で大祭、28 日に宮崎町内の神輿巡行、29 日に宮崎西部の神輿巡行という予定である。話者の考えでは、浜市の人のほとんどが移転してしまうため、浜市の人はあまり関与しない形で行われるのではないかと。また、下見をしてきた熊野神社の方々の話では、いつもしていたように堀を渡って海岸まで行くのは難しいので、手前の河口のあたりでご神体を海水につけることになるのではないかとのことだった。その後、復興への元気づけをかねて獅子舞を 3、4 か所でやりたいとのことだった。

潮垢離は、浜市の人にとっては、宮崎と鹿野家の行事という感覚。しかし、鹿野家に人がいなくなったので、区として協力するつもりである。

### 契約講

契約講は浜市が「区」などとよばれる以前から存在していて、浜市の全体がひとつの契約講をつくり、助け合ってきた。契約講はさらに 7 つの「班」あるいは「組」に分かれていて、葬儀などの互助ではそれが単位となっていた。総会は年に 1 度、全体でおこなわれていた。お膳や祭壇のような道具も講全体で持っていて、講長に借りた。

特に葬儀のときには同じ班の講員が死者の家に集まって、葬列のための飾り物や松明（詳細はよく分からないとのこと）などを作ったり、受付をしたりした。最近ではこのようなものは葬儀社が用意してくれる。土葬が行われていたころ（30 年以上前）には、陸尺などといった仕事があったように覚えている。

しかし最近では生活様式が変化し、とりわけ葬儀なども会館を利用することが多くなってきたところから、その意義が薄れてきており、最近では全体の半分の 65 世帯しか加入していなかった。不幸があると仕事を休んでも手回しをしなければならないので、世代交代などをきっかけにやめる家が増えてきていた。

震災の直前、3 月の第 1 日曜日の総会で講長が交代したばかりであった。震災後には特に活動をしていない。

### 石上神社祭礼について

石上神社は浜市全体が氏子になっている、由緒ある神社。宮司はおらず、市内大塩地区にある新山神社の土井宮司が管轄している。班ごとに 1 期 2 年の総代がおかれ、総代長が全体をまとめる。現在の境内は津波でやられて祭りなどできる状況ではない。集まる場所もない。神社庁でやしろを建て直してくれることになっているが、この先祭りを再開できる見通しは立っていない。

祭礼は春の 4 月 10 日と秋の 10 月 10 日の 2 回。班ごとに 1 年交代の持ち回りで祭りの世話をする。班の中の 1 軒の家を「ヤド」としてその家で料理をしていたが、最近では学習棟（地区センター）で料理をしていた。

祭りの前日には「ヨゴモリ」という前夜祭がおこなわれる。総代と総代長、宮司が夜神社に集まって祈禱をする。21 時ころには終わって解散となる。

翌日は朝 8 時からまず漁港で豊漁の祈願がおこなわれたあと、神社にて神事、直会がされる。10 年位前までは神輿の渡御もおこなわれていたが、担ぎ手がいなくなってしまったためやめてしまった。立派な神輿だったが、今回の津波で流されてしまった。祭りの次第は春・秋で同じである。

## ウジガミについて

浜市では家の外に祠をまつている家が多かった。話者の家でも、オイナリサンを家の守り神として祀っていた。祀り方は家によって違うと思うが、話者の家では、お正月や祭りのとき、田植えのときに赤飯をあげていた。

## お正月について

お正月には玄関、門柱、農業機械にしめ縄をかざった。12月28日ころにはお供えの餅つきをしていたが、今では機械でつく。餅は仏壇と、神棚、床の間においていた。正月の飾りは7日に神社で穴を掘って焼く。そのことを「ドント祭」と呼ぶ。昔は15日だったが、長く飾っているとその間に不幸があったりするとよくないので、少し早い時期に焼くようになった。

## お盆について

近くの小野地区では灯籠流しがおこなわれている。

8月14日の夜には集会所で盆踊り大会がおこなわれていた。夜店なども出て、たいへんにぎわっていた。より以前には小学校が会場だったが、広すぎると人が集まっても少なく見えるので、集会場に変更になった。

かつて8月13日には門柱のところで迎え火をたき、お盆が終わると送り火をたいていたが、最近ではする家がない。

お盆には盆棚をつくる。かつては田のヨシを乾かしてそれをござに編み、仏壇の前に広げてそこにお供え物をおいた。今ではスーパーで買う。仏壇の前には、なす、きゅうり、ほうずきなどの野菜をひもでつるす。また、なすに足をつけて馬をつくって置く。これも今ではスーパーに売っている。さらに、ハスの葉を白い柳の箸2本で3つに区切り、うどんやつみれなどを置いてそなえる。お盆が終わった後、かつてはこれらの供え物を川に流していたが、今では環境に配慮してゴミとして出している。



写真1 石上神社殿跡 (2月)



写真2 曹洞宗津龍院 (2月)